

審査委員長
青木 淳 建築家 AS 東京藝術大学教授

審査委員
堀部安嗣 建築家 堀部安嗣建築設計事務所 京都芸術大学大学院教授
平田晃久 建築家 平田晃久建築設計事務所 京都大学教授
小堀哲夫 建築家 小堀哲夫建築設計事務所 法政大学教授 梅光学院大学客員教授
南川陽信 大和ハウス工業 上席執行役員

賞金 **最優秀賞** 1点 各 **200万円** および記念品賞金 **優秀賞** 2点 各 **30万円** および記念品賞金 **入選** 4点 各 **10万円** および記念品

以上、1次審査通過7作品

賞金 **大和ハウス工業賞** 1点 **30万円** および記念品賞金 **佳作** 10点 各 **5万円**賞金 **総額 380万円** ※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金金額の配分を変える場合があります。

触れ触れ 触れ触れ 家から

テーマ

登録・作品提出締切

2021年10月7日(木) 消印有効

今こそ改めて、他者との深い関わり合いをもつ家を考える。これが今回のテーマです。

「触れる」という言葉は、直接相手に触るという意味を超えて、自分の気持ちを相手に伝えて労いや親愛の情を示すことを内包します。また「触れられる」という言葉には、誰かが自分に気持ちを伝えて繋がる状態になるために、触れてもらえる自分になることを示します。そしてふたつが連続した「触れて触れられる」という状態を住まいで体現すると、どんな家になるのでしょうか。それは、自分の欲だけのために家を考えるのではなく、

他者の欲を自分の欲にする家といえるでしょう。そして、触れてもらいたいと思われるように、自らが既存概念を取っ払い変わることや、自分とそれ以外の境界が溶け合うように関係性を再構築することにも繋がるはず。現在、世界中で新型コロナウイルス感染症の影響が未だ続き、他者との接触が禁じられ、直接対話したり、抱き合い欲や悲しみを分かち合う機会が極端に減りました。便利なツールが普及したことで、直接会わなくても交流をもてるようになりましたが、効率が優先されると、五感でものを理解したり相手の気持ちを慮

ることを忘れてしまいます。そのことを改めて問い、自分と他者との相互の関係性を考えることで、現在の社会や都市の中で家はどうかあるべきか、この先の希望を見い出せる家を考えてください。敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建て1棟や、戸建ての集合、併用住宅、リノベーションなど、形式やプログラムは問いませんが、ひとつの家として必要な空間を提案してください。「触れて触れ合える」という状態をどうとらえたかを定義して、多様な時代のこれからのふさわしい家の提案を期待します。

大和ハウス工業株式会社

本社 大阪市北区梅田3丁目3番5号 〒530-8241
東京本社 東京都千代田区飯田橋3丁目13番1号 〒102-8112
www.daiwahouse.com

コンペについてのお問い合わせ

<https://www.daiwahouse.co.jp/compe/>

主催：大和ハウス工業株式会社

後援：株式会社新建築社



エコ・ファースト企業
環境大臣認定
We Build ECO
Daiwa House Group

「触れて触れられる家」を考える



座談会風景。左から、南川氏、小堀氏、堀部氏、青木氏、平田氏。新型コロナウイルス感染症予防対策を十分に行ったうえで実施した。

座談会参加者

青木 淳 (建築家 AS 東京藝術大学教授)

堀部安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所 京都芸術大学大学院教授)

平田晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所 京都大学教授)

小堀哲夫 (建築家 小堀哲夫建築設計事務所 法政大学教授 梅光学院大学客員教授)

南川陽信 (大和ハウス工業 上席執行役員)

今、住宅に求めること

南川 今回で、ダイワハウスコンペティションは第16回を迎えます。新型コロナウイルス感染症(以下、コロナ)の影響で、2020年は開催を中止しました。2019年に開催した第15回のテーマ「愛の家」では、多義的でさまざまな解釈ができるテーマにしたところ、多様で優れた案が集まり、最終審査では激しい議論が交わされました。今回も「住宅」を課題の土台として、前回に引き続き内容を深めていきたいと思います。よろしくお願いたします。

司会 コロナによってもたらされた暮らしの変化は、建築家や建築学生だけではなく、建築を専門としない多くの人びとに家というものを見直す機会を与えたと思います。審査員の方がたは、コロナを経験して、家についてどのようなことを考えましたか。

平田 家や生活に対してさまざまな考え方があったことを改めて実感しました。私は、コロナ以前は京都と東京を頻りに往復する生活をしていましたが、この1年は移動が極端に減りました。同じ場所に長い時間にとどまっていることが多くなったことで、居場所が分散している状態が自分には心地よかったのだと気づきました。さまざまな場所を移動することでバランスを取っていたんです。

青木 私は逆に移動しないことがいかに快適かを知りました(笑)。生活に対してさまざまな考え方があったことですね。遠出できなくなり、近くの公園に行く機会が増えました。よく観察してみると、コロナ以前は、みんなで集まって騒いだり遊んだりするために公園を利用していましたが、外食ができなくなっている今、公園にご飯をもってきて静かに語らいつつ食べる人が増えています。集まっても宴会ではなく、会話に参加してもしなくてもよいという関係がつくられています。これが本来の公園のあり方なのかなと思うのです。

南川 働き方にもリモートワークやフレックスタイムが導入され、多様な生活に合わせた働き方ができるようになってきました。

小堀 外資系企業では出勤率が30~40%以下になっています。社員の中には家を改装したり、マンションに住んでいた人が戸建て住宅を購入するケースが増えているそうです。今まで家に求められなかったことが求められるようになり、住宅が新しいビルディングタイプになる予感がします。また、リモートワークの浸透によって、オンラインで会話をする機会も増えました。移動しなくても会話ができ便利になった一方で、失われていることも多いと感じます。「不利益」という言葉があるように、面倒臭い、不便だと思っていたことが実は重要であることがたくさんあります。山登りも歩いて山を登るのは不便ですが、ロープウェイを使わないからこそ楽しいわけですよね。

青木 そうですね。技術的には人と直接会って行わなければならないことと、オンラインで済ませられることを分けられるようになっていますが、物理的な都市や住宅、生活習慣はまだまだそれに合わせられていないように思います。

小堀 19世紀にフランス・セーヌ県知事のジョルジュ・オスマンは、病気が疫病が蔓延するパリを、直線を基盤とした衛生的な都市へと整備しました。衛生環境は改善したものの、古い街並みやごちゃごちゃした場所は失われ、都市の面白さが減ってしまいました。命を変えることはできませんが、面倒なことや不便なこと、汚いものと共存することも必要なのではないかと感じています。

堀部 私はコロナが、現代に地球が抱える問題の氷山の一角に過ぎないと思っています。一見天災だと思われるかもしれませんが、成長を前提とした社会、行き過ぎた資本主義、自然破壊や侵略など、近代以降の人間の驕りによる結果ではないでしょうか。ですから、コロナに特化した対処療法的な考え方では何も解決しないと思います。根本的な見直しが必要です。

平田 そうですね。コロナ単体で考えず、大きな問題の一部としてとらえることが大事だと思います。

青木 いくつかコロナが収束する時が訪れると思いますが、その時に、ただ元の世界に回帰するのではなく、今感じていることをもう1度じっくり考えたいので、次の時代をつくっていかなければならないでしょう。今抱えてい

る問題をいっぺんで解決する大革命は難しいので、まずは身近な問題や手が付けやすい問題から取り組むべきだと思います。

空間に働きかけ、読み替える

青木 たとえば、美術館は展示会の度に壁をたくさん立てて設営して会場構成をしますが、会期が終わるとすべて産業廃棄物になってしまいます。そういうことを考えると、そもそも展示会は美術館のいちばん重要な役割なのかと反省する必要があるかもしれない。今回、コロナを経験して住宅を考えるうえで、そもそも、ということから考えるのが重要かもしれません。

平田 そもそも、ということから家を考える時、最近気になっているのは、一般の人でも場所を読み替えて使っている例が増えてきたということです。

南川 そうですね。家が、「帰る場所」から「生きる場所」へと変化しています。

平田 生きるとは、自分の置かれている環境を自由に読み替えていくことといえるかもしれません。空間を自分自身と紐付けられたものにしていく。

小堀 在宅勤務を続ける人に話を聞いたところ、自宅の作業環境を整備してみたら、居心地があまりにもよくて、オフィスに行く理由がなくなってしまったそうです。自分で場所をカスタマイズすることに喜びを見つけて、どういう場所で働くのがいちばんポテンシャルが高いかということに気が付いてしまったんです。

青木 ひとつの家であっても、世代によって改修したり読み替えて使ったりできるように、ある生活像のための住宅ではない、さまざまな働きかけができる家をつくることが重要だと思います。

南川 言葉として適切ではないかもしれませんが、「無駄のある家」といえそうですね。ある人にとっては無駄であっても、別の誰かにとっては無駄ではない。または、今までは無駄だったものが、ある時からは必要なものになる。さまざまな関わり方ができるからこそ無駄であるし、必要でもあるのでしょう。

青木 面白いですね。無駄とは、それをどう使うのかによって判断基準が異なるのですね。

平田 先ほど青木さんが展示会の例を挙げられましたが、無駄がないものは役割を終えた瞬間にゴミになってしまう。読み替えの可能性が低いからともいえるのではないのでしょうか。

堀部 しかし、空間の読み替えは力のある人にしかできないことだと思います。センスもあって、しかも生活や心身に余力がある時に限られます。そのような強い人ばかりではないので、みんなが使えるような仕組みを考える

方がよいでしょう。たとえば京間は、すべて内法寸法で決まっているので、6畳であろうと8畳であろうと、畳、襖、欄間のサイズがすべて同じなので、家が変わっても使い回せます。みんなが使える拠り所があることで、自由に居場所を読み替えることができると思います。

他者を意識し五感で家を考える

堀部 前回のテーマ「愛の家」も、その前のテーマ「太っ腹の家」も、私たちは五感を駆使して家を考えてほしいという思いがありましたが、応募案を見ると、言葉のゲームとして考えてしまっている傾向を感じました。

青木 言葉が強かったのかもしれませんが。

平田 あまり概念的ではない素朴な言葉で、先ほど議論したように、人や空間に働きかけることを誘発するようなテーマがよいと思います。

堀部 「利他」という言葉はどうでしょうか。利他とは、他者を考えることで自分の感覚を見直したり研ぎ澄ませたりする概念です。他者を知り、共存を考えることで自分の五感も豊かになると思います。

青木 そうですね。ひとりのための家と複数の人が集まって住む家では住宅の考えも異なります。このコンペでは、今一度他者に思いを馳せて集まる家について考えてもらいたい。ひとりだけのための環境では、体験として何かを感じる装置のような場所をつくることはできますが、それでは家の本質を語ることはできません。環境と自分だけではなく、他者が要素として入ることが今こそ重要だと思います。それをどのように考えるかを出発点にするのがよいでしょう。

小堀 京都大学の山極壽一教授が、人間が集まり空間の空気が一瞬盛り上がる社交こそ、人間が進化の過程で獲得した、ほかの動物とは異なる特徴だと論じていました。住宅の茶の間や応接室はその中で生まれたのでしょう。住むうえで絶対に必要な場所ではありませんが、家に人が来る場所をつくることで人がアガる瞬間をつくっていたのでしょうか。

平田 今の社会が抱える問題は真剣に考える必要がありますが、真剣になり過ぎると元気が出ません。盛り上がった元気がなったりしていくと、知らぬ間に連鎖を生んで何か解決に向かうこともあるのではないのでしょうか。

堀部 少し気になるのは、「盛り上がる」や「元気」という言葉によって、これまでの負の出来事をリセットして、緩んだ地盤を顧みずに上だけを向いてしまう提案が出てくるのではないかということです。盛り上がる仕掛けをつくっても、今まで置き去りにされていた問題が解決するわけではなく、むしろ露呈してしまいます。

青木 確かに「盛り上がる」や「元気」という言葉は誤解を与えるかもし

れませんね。何のために人が集まっているのかという本質に迫るには、人と人、ものと人の触れ合いを表す言葉がよいと思います。

小堀 「高め合う」という言葉はどうでしょうか。先日、細胞の専門家に話を聞く機会がありました。細胞は分裂する時に、互いに隣接する細胞を



意識しながら分裂するそうです。他人があるからこそ自分があるように、細胞もお互いがより多く増殖できるように高め合っているのです。

南川 周りがいてこそ高まるというのは、魅力的な考えですね。

堀部 「高め合う」だとまだ言葉が強いように感じます。抽象度が高すぎると同じようなアイデアが出てきてしまう可能性が高いと思いますし、これまでとテーマがあまり変わっていないと

らえられるかもしれません。

青木 たしかに「高め合う」だと、抽象的ですが、「高まり高められる家」のようにふたつの言葉を繋ぐと、さまざまな関係を含めて「高まる」といっていることが伝わると思います。

南川 能動態と受動態を組み合わせることで、自分と他者を意識してほしいという意図が明確になりますね。

触れて触れられる家

堀部 ゴリラとチンパンジーの違いのひとつは、ゴリラは鏡に映った自分の顔を見て他者だと認識する一方、チンパンジーは鏡に映った自分の顔を見て自分だと認識するところだそうです。その理由は、チンパンジーは、仲間と喧嘩したり戯れたりする時間が長いからで、触れ合って肉体的に他者を知ることで自分を認知しているのです。

青木 「触れる」という言葉はよいかもしれません。「触れる」と「触る」はニュアンスが異なります。「触れる」は、触れた対象と関係をもつという意味で、「触る」は物理的な対象として触ることを指しています。だから医師の触診は、「触れる」ではなく「触る」なのだそうです。医師が気持ちをもって「触れる」と患者が怖がるので、ものとして「触る」必要があるのです。伊藤亜紗さんの『手の倫理』（講談社、2020）を思い出しました。

司会 「触れる」は、琴線に触れる、怒りに触れる、話題に触れる、人の目に触れる、核心に触れる、のように



目に見えないものに対しても使う言葉ですね。

小堀 コロナによって、手摺りに掴まったり、握手することを躊躇うほど「触る」ことが避けられています。こうした状況下では、「触れる」という言葉がもつ意味を考えさせられますね。

平田 「触れて触れられる」と反復する方が、相互作用なのだという思いが込められてよいと思います。

青木 そうですね。抽象化された言葉では、「触れる」とは何かから考え始めてしまう可能性があるので、文章にして関係性を伝えましょう。

南川 いいですね。議論の内容が盛り込まれたテーマになっていると思います。

司会 それでは第16回ダイワハウスコンペティションのテーマは「触れて触れられる家」にしたいと思います。

応募者に期待すること

小堀 「触れて触れられる」は、何かが共鳴していることを感じられて面白い言葉だと思います。魅力的な提案を期待します。

堀部 自身の五感と他者の五感を感じざるを得ない言葉が見つかったと思います。それを踏まえてかたちをつくってもらいたい。オンラインやテレワークのよさもありますが、物理的に「触れて触れられる」ことも大事です。その両立を考えてもらいたいと思います。

平田 目に見えなくても、さまざまなかたちで「触れて触れられる」ことがあります。人間同士の「触れて触れられる」の関係を超えて、「触れる」という言葉もっている、もう少し大きな意味を考えてください。多様な案が出てくることを期待します。

南川 「触れて触れられる」には、テーマ会議の中で出てきた関わりや高め合うという意味が含まれています。コロナの状況にも繋がるテーマになったと思います。応募者の方がたにはその意図を汲んでもらい、人との関わりを高め合うことを表現してもらいたいと思います。

青木 「触れる」と「触る」がどのように異なっているのかを自分の体験をもとに考えてください。同じ道具を使う行為でも「触る」道具と「触れる」道具ではその意味することが異なります。たとえばのこぎりを使う時、自分の手の延長と意識しているのこぎりは「触れる」ですが、自分とは異なるいわゆる道具の機能だけとすれば「触る」です。「触れる」と「触る」は、自分が他者と、どのような境界で接しているかということに関わると思います。そこを考えた家の提案を期待します。

(2021年4月16日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)

